

森田秋子（編）

日常生活から高次脳機能障害を理解する 認知関連行動アセスメント

渕 雅 子

（九州栄養福祉大学，作業療法士）



書評を書くのは大変気を使う。なぜなら、褒めないわけにはいかないからである。しかしそんな気を使うことをまったく考えもせず、そして「一気に読み終わった！」というのがこの本を読んだ最初の感想である。こんなに簡潔に高次脳機能障害を表現している本はあるだろうか？こんなに項目立てがクリアな本はあるだろうか？そして、著者の森田秋子さんがいつも最も大事にしている生活から高次脳機能障害をみるというぶれない視点を、こんなに表現できている本はあるだろうか？

まず手に取ると、カラーで美しく、優しい体裁に心惹かれた。初心者向けかと思いきや、なんとフィニアス・ゲージの話から始まる。私のお師匠さんで、世界的な前頭葉の研究者である久保田 競先生は、早くから彼の存在を、前頭葉機能の障害の理解のために紹介している。この本もまた同様の思考から、ゲージの事例を紹介するのである。そのうえで高次脳機能障害を理解するためには外せない

基本項目で、1章が構成されている。次の2章では高次脳機能障害をみる視点として、大変重要な2つのモデル（神経心理ピラミッド、行動・認知モデル）を紹介し、並列では理解できない立体的な高次脳機能障害の見方を、続く3章と共に提示している。

そして何よりもこの本のトピックスである、認知関連行動アセスメント（CBA）について4章で紹介している。他に生活から高次脳機能障害をみる視点を取り入れた本もないわけではないが、本当に日々患者さんと接し、理解したい、どうにかかかわりたいと模索した森田さんの長年の熱い思いを知っているだけに、こんなに臨床的かつシンプルにまとめた評価視点ができるものなのかと感心した。

この紹介で終われば、「こんな評価もあるのね」でおしまいであるが、評価視点に加え、さらに介入視点の豊富さに驚かされる。この本の分量の半分は介入についてである。

介入には大変個性が出たり、独善的であったりするが、森田さんが重要視しているかかわりである多職種との協働について、大変よい構成で書かれている。機能に焦点を当てたかかわり（5章）、それぞれの専門職が責任をもたないといけないかかわり（6章）、生活障害だから外せないチームでのかかわり（7章）、そして最も大事な事例からみること（8章）。最後はQ&Aとしながらも、日々さまざまな人から投げかけられる、しかし最も声を大にして森田さんが言いたいことが、この本をまとめるかのように書かれている。

これだけの膨大な内容を、見た目にもわかりやすく、やさしく書かれているこの本は、一読で終わらせることなく、臨床にしっかり役立ててほしい一冊である。

〔 B5判 120頁 2,800円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕